クライム・トゥ・ザ・ハッピー

ライスサワー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クライム・トゥ・ザ・ハッピー

【Nコード】

N0662W

【作者名】

ライスサワー

【あらすじ】

無視されて、陰口をたたかれて、暴力を奮われる。中学生の奥山は、学校に存在する権力ピラミッドの最下層で、度重なるいじめをうけていた。しかしある日、ピラミッドの頂点に君臨する男、稲倉に頼みごとをされる。全く住む世界の異なる二人に接点ができたとき、奇妙な友情が芽生えていく……

前向きな青春ストーリー。

少年の再生と成長の物語です。

底辺と頂点(前書き)

縦書き表示推奨です。

底辺と頂点

窓際族というと、社会的には弱者を表す言葉らしい。とんでもない。中学生社会において、窓際族は暴走族にも等しいパワー系集団なのだ。世間が不良と呼ぶ素行の悪い少年たちは、なぜか窓際に好んで座る。たぶん自分で体温を調節できないから日光浴をする、ハチウ類なんかと脳みそのレベルが同じなんだろう。窓際が埋まると、次に体育会系の馬鹿たちが授業中に好きなだけ眠れるように後ろの席を占拠する。そして俺のような教室難民は、自然と最前列のど真ん中へと追いやられるのである。

「あら、奥山くんはまたここなの？」

ダメ教師の沢木が俺を見て言った。ふざけんな。おまえが「席替えするので、自由に好きなところへ座ってね」とかアホなこと抜かすからだろうが。

一応、同じ席には座れないというルールがあるのだが、完全に形骸化していた。隣同士一個ずれるという誰もが思いつくような法の抜け道が使われ、教室内の勢力分布が変わることは無かった。

「ほらほら、あなたたちも早く席選んで座りなさい」

沢木がまだ立っている男子たちを促した。空いてる席といえば、もう俺の前後左右に斜めを加えた場所のみである。この展開もいつもと同じだ。変わることが無い。

「オタク山の周りかよお」

残りモノ系男子の一人、田中が口を尖らせた。ちらちらと窓際の不良グループを見ている。馬鹿らしい。俺の近くの席が嫌なことを、不良たちにアピールしてるのだ。自分まで八ブられないように。

「おれ、せめて隣は避けたいわ」

「あ、ずりい。おれだって後ろがいいんだけど！」

他の男たちもアピールに必死だ。いま席を確保できてないという時点で、この男たちがピラミッドの下部にいるのは明らかなのに。

それでもこいつらは俺を自分たちより弱い男に仕立て上げて安心していいわけだ。

沢木が露骨な差別発言にオロオロとしている。やめなさいよ、と健気に注意しているが、中学生とはいえ男ばかりのクラスに怯えているのがバレバレだ。及び腰の教師に素直に従う者などいない。クソ教師が。怖いんだったら男子校になんか来るなよ。

「奥山くんも、黙ってないで嫌なことはちゃんと言わないと」沢木が言った。

思わずカツとなった。自分の無能ぶりを棚に上げて俺を悪くいうのかよ。こっちは被害者だつっの。

「オタクやまあ。なに、おまえ文句あんの？」田中がニヤニヤと訊いてきた。調子に乗りやがって、おまえだって底辺のくせに。

「おい、なんか言ってみろよ！」

田中が俺の背中を揺すった。人に触られたのは二週間ぶりだった。

「ぼ、ぼくは」俺は仕方なく口を開いた。声を出したのは三日ぶりだった。「あの、べつに、なんでもないでしゅ……」

噛んだ。久々の日本語に舌がもつれたのだ。

教室に爆風のような笑い声が轟いた。馬鹿どもは腹を抱えて笑い転げていた。

「な、なんでもないんでしゅか」

「オタク山くんはビビりでしゅね」

悪魔たちは俺の真似をしながら目に涙を浮かべて笑った。何がそんなに可笑しいんだ、このやろ。耳障りな声で爆笑する悪魔たちを、俺は頭の中で殴り続けた。想像の中の男たちの顔が青ざめれば青ざめるほど、俺の顔は羞恥で赤くなっていった。

いうまでもなく、俺の発言は「デシユ語」と名付けられちよつとしたブームになった。

俺は三階のトイレを掃除していた。いや、掃除の時間を潰してい

た、という方が正しい。雑巾もブラシも持たず、俺は窓の外に見える中庭をぼんやりと眺めていた。

今日は掃除場所に来ているのは俺一人だけだった。ラッキーだ。悪魔たちが俺を個室に閉じ込めて水をかけたり、便器用ブラシで顔を擦ってきたりするのに比べれば、いつそ掃除を押し付けられた方がありがたい。あとは掃除終了の放送が流れたら、速やかに教室に戻ればいいだけだ。遅くなると掃除を終えた悪魔が用を足しに来て、ついでに俺に一蹴りいれていくのだ。

ベートーヴェンの「田園」が流れた。掃除終了の時刻だ。最初のうちは、俺はこの長閑な曲を掃除終了の音楽に選んだ奴のセンスを絶賛していた。一日の長い苦行を終え、肩の力がふつと抜ける感覚にびったりだと思っただのだ。しかし最近、俺は一日が終わったことへの喜びと同時に、翌日への憂鬱を感じるという離れ技を身に付けた。そうなると、「田園」は急に能天気で空気の読めない曲へと姿を変えた。俺は選曲者への絶賛を取り消し、代わりに大馬鹿という称号を授けた。この称号は俺以外のほぼすべての人間が授与されているので、あまり価値は無いのだが。

俺が教室に戻ろうとトイレの窓を閉めていると、入り口のドアがギイツと開いた。

うかつだった。窓なんて律儀に閉めずにスタートダッシュを決めるべきだったのだ。

トイレに二人の悪魔たちが入ってきた。デカブツとチビ。違うクラスの男たちだがそんなことは関係ない。俺への差別はボーダレスなのである。

「オタク山じゃん」チビの方が言った。

俺はその場から動けなくなってしまった。黙って出て行こうとすればタダじゃすまない。かといって残っていてもタダじゃすまないのだが。

チビが便器に向かって用を足し始めた。デカブツは何もしないで立っているだけだ。用が無いなら来るなよ。こいつらは一人じゃ小

便もできないのか。いつでもどこでも群れやがって。

「あ、こいつ今、おまえのチコ見てたぞ」ボーツと突っ立っていたデカブツが、用を足していたチビに向かって言った。

「げ、マジかよ」チビが放尿を終えた生殖器を慌てて閉まった。「なに、おまえホモなの？ 気持ちわりいな」

「は？ なにいつてんだ。誰がおまえのみすばらしいムスコなんか見るか。」

「うわ、こいつ言い返さねえし。ガチかよ」チビが顔をしかめた。

「おいおい、おまえ今日のオカズにされちまうぞ」

デカブツは下卑た顔で笑うと、手で輪を作って股間の前で前後させた。下品な奴らだ。こいつらの頭には性に関することしか入っていないのだろう。

「キメえんだよ！」チビが俺に蹴りを入れた。デカブツの方も、なんでもかんでも真似するサルのように蹴りを入れてきた。腹に足が食い込む。口の中がすっぱくなった。

いつもなら一回蹴りを入れられるだけで済むのだが、なんの増量キャンペーンなのか、二人の悪魔は何度も何度も俺を蹴った。胃から何かがせり上がってくる感覚がして、気がつく俺は嘔吐していた。

「わっ、汚ねえ！」デカブツの足に俺の吐瀉物がかかった。「どうしてくれるんだよ！」

吐いたせいで俺はますます蹴られた。理不尽さに対する怒りすら、苦しさのあまり湧いてこなかった。

ギイツとまた入り口のドアが開いた。ああ、さらに悪魔が増える。どうか下級悪魔でありますように。

入ってきたのは一人だけだった。が、その一人が最悪だった。うちのクラスのドン、稲倉である。

「げっ……」チビが顔色を変えた。悪魔たちの中にもランクがあって、雑魚キヤラはラスボスの逆鱗に触れないようにいつも怯えている。つまり、チビたちと稲倉の関係がそうだという意味だ。チビと

デカブツは稲倉に関わらないよう、すごすごと退散していった。

トイレの中には吐瀉物にまみれた俺と稲倉だけが残った。これは俺にとつても最悪だ。全治三カ月までは覚悟を決めた。入院して学校を休めるならそれもいいかな、と場違いに思った。

「汚ねえな」稲倉は吐き捨てるように言った。「臭えし」

俺は体を震わせて黙っていた。こういうときに謝罪を口にするのは素人だ。俺のとれる最善の策は、石ころのように何もしないことだった。

「こんなところで小便できるか」

稲倉はそういうとトイレの外へと出て行ってしまった。

奇跡だ。

俺を蹴らずに悪魔が帰っていくなんて。今日の俺は十二年に一度の幸運期なのだろうか。さすがにそれは無いか。自分の体が吐瀉物まみれなのを思い出して俺は考えを改めた。

トイレットペーパーと水道水で俺は制服をきれいにしようとしたが、匂いも汚れも完全には落ちなかった。

「また吐いちゃったの？」お袋が俺の制服を手にとって目を丸くした。うるさい。おまえは黙って洗濯すればいいんだ。

「なあ、病気かもしれんから病院に……」

お袋の言葉が言い終わらぬうちに、俺は早々に部屋へと戻った。

親には俺が差別されていることを言っていない。あんな馬鹿面の親から、同情の目を向けられたらうんざりするからだ。

部屋に帰ると俺はすぐに参考書を広げた。世の中に何百人といわれる差別者の悪いところは、逃避の方向をネットやゲームに向けるところだ。そんなんだからいつまでも底辺から抜け出せない。俺は成績をあげて高校は一流の進学校に通うつもりだ。頭のレベルが高い奴らならば、きっと俺を認めてくれる。俺の親は優秀な息子を持つてなんて幸せなのだろう。

コンコンと部屋の戸がノックされた。

また余計な心配をかけてくるつもりか？ 俺はイライラしながらドアを開けた。廊下にはお袋が電話の子機を持って立っていた。

「たくちゃんに電話」お袋はおずおずと受話器を差し出してきた。俺はひつたくるように受け取ると顎をしゃくつてお袋を追いやった。

ドアが閉めると俺の心臓がバクバクいい始めた。電話？ 俺に連絡をとりたがる奴がいるとも思えないし、いるとしたらロクな用じやないに決まっている。切ってしまうおうかとも思ったが、そうなる和学校で何をされるか分からない。

俺は黙ったまま受話器を耳に当てた。相手を確認してから対応を決めればいい。しかし通話相手は受話器の向こうで沈黙したままだった。仕方が無い。俺は意を決して要件をきくことにした。

「もしもし」声が震えた。「し」の発音もひどく悪い。

受話器の向こうで人が動く気配を感じた。

「……奥山か？」相手がようやく喋った。

当然だが、聞き覚えがある声だ。さて、これは誰の声だったか。

他人には興味がないし、いかんせん人を侮蔑するときの声はみんな同じに聞こえるものだから、電話主の声と悪魔たちの顔が結びつかなかった。

「あ、あの……」

誰ですか、と訊こうとして言葉が出なかった。相手を不快にさせたら明日蹴られるかもしれない。

「おれ、稲倉」男の声があった。

稲倉？

金属バットで頭を殴られたようだった。言葉の暴力というのは本当にあるらしい。四音節の名前を聞いただけで、俺はひどく気分が悪くなった。

「いまから俺ん家に来い」

「え？」一瞬、言われた意味が分からなかった。

「三十分以内」稲倉はそう言い残して電話を切った。

俺は呆然として受話器を耳に当てたまま、ツーツーという電子音を聞いていた。

家に来い。三十分以内。

どんな死の宣告だこれは。医者にあなたは末期ガンですと言われた方がまだマシな気がした。今日のトイレでの事が気に障ったんだろうか。きつと稲倉の家には不良たちが待ち構えていて、骨の八割が折れるか胃の中のを全部出すかするまでリンチされるに違いない。

俺は慌てて父兄会の役員名簿と電話帳を引つ張り出して稲倉の住所を調べた。どんな地獄が待っているかというと、三十分内にはいかないと命が危ない。稲倉の家はうちからチャリで十分ほどの場所にあるよ。うだった。そんなに近くに魔物の巣窟があったとは。俺は五分を衝撃を和らげそうな服を選びだすのに使い、五分を気持ちを落ち着けることに使い、五分間この世でやり残したことがないか考えた後、ようやく家を出発した。

稲倉の家はどんな禍々しいオーラを放っているかと思えば、なんでもないクリーム色の二階建てだった。可愛らしいぐらいだ。なるほど悪魔の親玉はあえてファンシーな家をアジトとすることで、世間の目を欺こうとしているようだ。俺は深呼吸をしてインターフオンのボタンを押した。

「はい」優しそうな女性の声が出た。母親だろうか？ 大人がいるなら悪魔どももそこまで暴れることはできないだろう。少し気持ちが落ち着いた。

「あの、中学のクラスメイトの、あの、奥山っていいですけど、その」

「ああ、奥山くんね」女性が合点したように言った。「どうぞ」門が開いた。俺はきれいにガーデニングされている庭を歩いていった。ガレージに黒塗りのベンツが見えた。そうだ、あれこそ悪役にふさわしい車なのだ。ベンツはかなりほこりを被っていて余計に

意味ありげだった。ほらみろ、いよいよこの家が本性を表してきたぞ。

「いらつしゃい」

扉をあけると先ほどの声の女性が待っていた。きれいな人だった。あの冷淡な目をした稲倉と同じ血が通っているとは思えない。

「シユウは二階の部屋にいるからね。登ってすぐ右の部屋」

「あ、はい」俺は緊張した面持ちで答え「おじゃまします」と消え入りそうな声で付け足した。

サツと玄関の靴をチエックする。三足。女モノはこの女性の、男モノは稲倉の、もう一足の皮靴は中学生が履くような代物じゃない。悪魔たちが素足でやってきていけない限り、稲倉は一人のはずだ。

俺は重い足取りで階段を登った。落ちつけ俺、向こうも一人だ。かといって俺に何かできることが増えるわけじゃないが、最悪の事態は避けらそうだぞ。

登ってすぐ右の部屋。ここか。俺はもう一度深呼吸をするとコンコンとドアをノックした。すぐにガチャリとドアが開いて、稲倉がぬつと姿を現した。

「よう」稲倉が言った。怒気は感じられなかったが、こいつはいつも無感情に喋るので簡単には判断できない。

「入れよ」

「はい」

俺は思わず敬語で答えると、悪の総本山へと足を踏み入れた。

意外にも小奇麗に片付いた部屋だった。というよりも物が少ない。ベッドと丸いガラスのテーブルが置いてあるだけで、ポスターもカーペットも椅子すらも無かった。置かれている二つの家具がお洒落なおかげで、なんとか刑務所と見分けがつくといった感じだ。

「座れよ」稲倉が言った。こいつは十文字以上続けて喋らないんだろつか。俺は指示通りにしようとして動きを止めた。どこにどうやって座ればいいのか。正座は最低ラインとして、テーブルの前に腰を降ろしたら、偉そうな奴だと思われて機嫌を損ねるのではな

いだろうか。

「なにしてんだ」稲倉が怪訝そうに言った。

「あ、いや……その」

拳動不審な俺の態度に、稲倉の眉がつり上がった。いけない。怒らせてしまう。

「ど、どこに座れば……」思いきって訊ねた。

「は？」稲倉が目を細めた。

「あ、すみません」俺がすぐさま謝った。出過ぎたことを言っってしまった。

「なにを謝ってんだ？」稲倉は首を傾げるとテーブルの前を指さした。「ほら、そこに」

そこに、座れ、だよな。俺はビクビクとしながらテーブルの前に正座した。

稲倉は部屋に備え付けられているクローゼットを開けて、灰色のクッションを二つ取り出した。そのうちの一つを俺に放り投げる。

「クッション」稲倉が言った。

クッションに、座れ、でいいんだろうか。稲倉がクッションを尻に敷いたのを見て、俺は様子を窺いながら正座を崩してクッションの上に腰を下ろした。幸いまだ一度もぶたれても蹴られてもいなかった。幸運期説が有力性を増した。

「あのさあ、おまえに頼みがあんだよね」稲倉が俺を見て言った。

珍しく長い文を喋ったな、と俺は感心した。そしてすぐに何を頼まれるのか想像して背筋が冷たくなった。合法的な範囲なら何を要求されても言うことを聞く覚悟だが。

「俺に勉強を教えてくれないか？」米倉が淡々と言った。

「え？」

今なんと言われたのだろう。勉強を教えろと聞こえたが、俺の逃避願望が「金を出せ」と言われたのを聞き間違えさせたのかもしれない。

「勉強」稲倉がもう一度言った。「おまえ、成績いいだろ？」

「え……あ」

はい成績優秀です、などと言ったら殺されるかもしれないのと、事態の展開が呑み込めなかったのとで、俺は言葉を濁した。どうやら本当に稲倉の頼みとは、俺に勉強を教えてほしいということだったらしい。

「勉強？」俺が啞然として呟いた。

「そつだよ、何度言わせんだ」稲倉がイライラと言った。

稲倉が、勉強。警察官が強盗するようなものだぞと俺は考え、いやそつちの方がまだありえそつだなと思っただ。

稲倉はベッドの下から何冊かの冊子を取り出した。アダルト関連の雑誌かと思っただが、数学の参考書と問題集だった。

「ほら、さつさと教えろ」稲倉がバンバンと問題集を叩いた。

簡単に言ってくれるじゃないか。靴を舐めると言われればそんなことはすぐ出来る。しかし勉強を教えろと言われても、教員免許どころか口クに人と話したことすら無い俺には難題だ。とりあえずテーブルの上に教科書を広げさせ、俺は混沌とした頭で家庭教師を始めた。

それからの稲倉と俺のやりとりは、ぎこちないことこの上なかった。

俺はとにかく文末に気をつけ、「ここはこうしろ」という文章を「ここはこうしたほうがいいかもしれない」という文に全て変換して話した。稲倉は稲倉で分からないところがあると(多々あったが)、「ああ？」とか「はあ？」とか機嫌悪そうにつぶやくので、俺はその度にビクビクしなければならなかった。一分が一時間に感じられ、どんどん疲労が溜まっていった。早く稲倉のやる気が無くなることを祈ったが、悪の親玉は信じられないぐらいの集中力を持続させていた。

「シユウ、ばんごはーん」

下の階から間延びした女性の声が聞こえてきた。時計を見ると八

時になるうかというところだった。かれこれ二時間近く勉強していたことになる。

「あの……」俺がおずおずと切り出した。「夕飯らしいし、今日はこの辺にしときませんか？」

「もう少しだけ」稲倉は問題集を見つめたまま答えた。

その真剣な目を見つめて俺はハツとした。俺も死に物狂いで勉強しているから分かる。こいつは本気だ。事情は知らないが、本気で勉強して成績をあげようとしているのだ。

「シユウ！ ごはんだってばあ！」再び階下から声が聞こえた。

「つたく、うるせえババアだ」稲倉が苛立たしげにシャーペンを置いた。

俺はふうと息を吐きだして肩の力を抜いた。ようやく終わりのようだ。いくら稲倉が本気だろうと知ったこつちやない。体力的にも精神的にもヘトヘトだった。

「おい」稲倉が俺を見据えた。「おまえも食ってけよ」

はい？ どうも今日の稲倉は予想外の言葉ばかり言う。まさかデイナーに誘われるとは。

「いや、今日は勘弁してください」泣きそうな声で俺が言った。

「なんだよ、人が親切で言ってるのに」稲倉が俺を睨む。「まあおまえが嫌ならいいけど。帰れば？」

いつもの俺なら「これは試されている！」などと疑って、素直に夕飯を食べていくところだが、とにもかくにも早くこの場から立ち去りたかった。それならお言葉に甘えて、と俺は自分のバッグをひつつかむと一目散に退散した。焦りすぎて「おじゃましました」を言うのを忘れた。明日学校でシメられるかもしれない。

でももう、どうでもいい。俺のキャパシティはもうとつくにオーバーしている。一体何が起こっているのか、早く自分の部屋で整理したかった。

底辺と頂点（後書き）

初投稿です。このサイトの使い方もよくわかってませんが、マツタリ書いていきますので、ご感想よろしくお願いします。

底辺と頂点2（前書き）

縦書き表示推奨です。

底辺と頂点2

明日になったら宇宙人が地球を侵略しにきているかもしれない。淡い希望を抱いてベッドに入ったが、朝になっても東京タワーは折れていないし、国会議事堂は火煙をあげていないようだった。

それでも台風十三号が接近しているとお天気お姉さんが言っていたので、これは強烈なスラッガーが来たぞと期待していた。が、十三号はビッグネームな割に成績不振で、電線をゆらし畑を湿らしただけで姿を消したようだ。十三号どころか一号ホームランすら打てていないじゃないか。

ようするに俺は今日も学校に行かなければならぬらしい。

朝は一日の中で最も憂鬱な時間だ。俺は望んでもいないのに、一体誰のためなのか、今日も学校に向かってチャリを漕いでいた。憎らしいほどの快晴に反比例して、俺の気分は曇天だった。

俺に勉強を教えてくれないか？

昨日の出来事を思い出す。悪の枢軸、不良どもの大将である稲倉が、俺に勉強を教えろと言ってきた。昨今の嫌がらせ方法はそのライナップをどんどん増やしている。俺は新製品を端から売りつけられるかのごとく、あらゆるパターンの嫌がらせを経験してきたが、家庭教師になれと言われたのはさすがに斬新すぎた。稲倉の考えはサッパリわからない。

勇気と元気を出そうと思って、俺は朝らしくラジオ体操の歌を口ずさんでみた。どうもしっくりこない。短調に編曲してもう一度歌ってみた。うん、俺らしい。歌詞の中の「希望」を「絶望」に変えたら、もう俺のテーマソングにしか思えなかった。

チャリ置き場には稲倉が待ち伏せしていた。

「よう」稲倉が手をあげて言った。

一応周りを見まわしたが、俺以外の人間はいなかった。

ひよっとすると稲倉は霊感が強くて、俺には見えない未亡人の霊に挨拶したのかもしれない。それか待ち合わせ場所で彼女と会ったときの挨拶の仕方を練習しているとか。なんでもいいから俺に言ったんじゃありませんように。

「おい、おまえだよ」稲倉がチツと舌うちをした。
「やっぱりそうか。」

「あ……あの」挨拶されたからには何か返事をしなければ。昨日、稲倉の家を黙って出ていったことに機嫌を悪くしているのかもしれない。ああ、ちゃんとあのとき、一言いつてから帰れば……。

お……お……

「お、おじゃましました」

無論、俺は「おはようございます」と言つつもりだったのだ。焦っていたんだから、しょうがない。知らない人をお母さんと呼ぶことだってあるじゃないか。

「はあ？」稲倉が眉間にしわを作った。

「あ、あの、ほら」俺が目を泳がせた。「昨日帰るとき言っただけだから」

何を馬鹿なことを言ってるんだ、俺は。舐めてません、舐めてませんからどうか蹴りは一発だけにしてください。しかし、俺が受け身の体制をとつても、稲倉は攻撃してこなかった。

「なんだそりゃ」

稲倉はブツと嘔き出した。だんだんしかめっ面が崩れていって、最後には口を大きく開けて笑いだした。稲倉はもつと悪者らしくゲツヘツへと笑うのかと思いきや、意外に爽やかにアハハと笑った。

稲倉のこんな顔を見るのは初めてだ。普段の険しい表情は、「こいつがうちの組の若頭です！」と言われても「ああ、やっぱりね」という感じなのだが、顔をくしゃくしゃにして笑う姿は中学生の男子に見えた。

「あのさ、俺がおまえに家庭教師頼んだこと、誰にも言つなよ」
稲倉は笑いながらそう言つと、何事も無かつたかのように去つていった。

俺は般若がフランダースの犬を見て号泣しているところを目撃したよな気分だった。あるいは清纯派アイドルが鼻くそでもほじっているところを見たよな。とにかく、珍しいものを見てしまった。言い知れぬ爽やかな風が俺の心を吹き抜けた。そういえば、誰かに嘲笑されることはあつても、笑いかけられたのは久々だ。俺はチャリの前輪の鍵と後輪の鍵、それからサドル盗難防止のストラップがちゃんといっているのを確認して、昇降口へと向かった。

試しにラジオ体操の歌を原曲通りに歌つてみた。さっきよりは俺に馴染む気がした。

バシャつと俺に水がかけられた。尿意が我慢できずに、教室から一番近くのトイレに駆け込んだのがまずかった。トイレという閉鎖的な空間が、嫌がらせの温床だつてことは分かっていたのに。

「うは、おまえビビツて漏らしちゃつたのか？」

男がニヤニヤと笑つた。たしか海老沢とか言う奴だ。海老というよりはゲツ菌類に近い顔をしている。

俺の股間からポタポタと水が滴り落ちた。断じて言うが俺は漏らしていない。用を足し終わつたあと、このビーパーが入つてきて、俺の股間に水をかけたのだ。

馬鹿馬鹿しい。低俗な遊びだ。俺は黙つてトイレトペーパーを引き出し股間を拭いた。昨日もこんなことをしていた気がする。俺のトイレトペーパー使用量は町で一番かもしれない。

「なんか言えよ」

わき腹に鈍痛が走つた。ビーパーパンチが当たつたのだ。殴られるくらいなんてことない。おまえのその飛び出た前歯を突きたてられなくてよかつたよ。

黙ったままの俺をビーバーは気に入らなさそうに一瞥すると、唾を吐きかけて廊下へ出て行った。

「おい、あいつのズボン」

「うげ、マジかよ」

ヒソヒソと話す猿どもの間を通過して、俺は自分の座席へついた。

「オタク山くん、漏らしちゃったのお？」

隣の席の田中が口元を歪めて言ってきた。アホに関わりたくない。俺は何も言わずに次の授業の教科書を鞆から出した。教科書は水につけられたり踏まれたりしてボロボロだったが、泣きごと一つ言わずに俺の成績を上げてくれていた。

「小便可せえぞ！ オタクやまあ！」

後ろの方から千切られた消しゴムが飛んできて俺の頭に当たった。そいつはおかしいな。俺は漏らしてないんだから、おまえの嗅覚がおかしいんだろ。耳鼻科行ってこい。

「くせえくせえ」

「あ、マジだ、臭うぞお！」

猿どもが笑いながら鼻をつまんでみせた。そうかいそうかい。そんなに臭うならおまえら猿の誰かが漏らしたんじゃないのか？

俺はじつと教科書を見つめた。猿どもの笑い声で内容はまるつきり頭に入ってこなかったが、そうするしか無かった。教師はまだかもう授業開始時間だぞ。あと一分以内に来なかったら教育委員会に訴えてやる。

俺はチラリと窓の方を見た。稲倉は窓際最後列、王者のイスに座ってつまらなそうに窓の外を見ていた。俺の心にモヤモヤとした気持ちの流れた。

なんで何も言ってくれないんだよ

稲倉がふつと教室に顔を戻したとき、俺と目があった。慌てて教科書に視線を戻す。俺も落ちぶれたもんだ、誰かに縋るなんて。だいたい稲倉は不良たちの親玉じゃないか。

「オタク山、てめえさつきから何こつち見てんだよ！」

窓際の猿の一匹が吠えた。あれは稲倉の金魚のフン、梶谷だ。誰がおまえなんか見るか。俺が見てたのは猿山の大将の方だつーの。ついでに言うなら俺はその大将から、ディナーに誘われた男だぞ。

「なにニヤニヤしてんだ！」梶尾が青筋を立てた。「黙ってねえでなんとか言えや！」

金魚のフンが喋るなんて大発見だ。喋るウサギとかなら需要もあるだろうに、神様はなぜ金魚のフンに言葉を与えたのか。

「なにを騒いでるんだ。静かにしろ」

ようやく国語の教師がやってきた。このゴリラ教師も、目が節穴の使えない奴だが、一応生徒たちを黙らせるぐらいの迫力は持っている。怒って座席を立ち上がりかけていた梶谷は、舌うちをして席に座りなおした。

やっと休み時間が終わったか。ゴリラの授業遅刻はギリギリ一分程度だったので、教育委員会へ訴えるのは憂慮してやることにした。俺の脇は、冷や汗でびしょびしょだった。

今日もまた、俺は悪の中核、稲倉の部屋に来ていた。もつれる舌を必死に動かして、稲倉に二次関数問題の解答へ導くのが今日の仕事だ。誰か物好きな人が仕事を代わってくれるのを切に願う。時給ゼロ円で交通費も出ないが、刑務所スタイルの部屋で極悪死刑囚みたいな男と二人つきりになれるのだ。マイノリティの中の少数派の分岐小隊みたいな嗜好の持ち主にはたまらないはずだ。

「できたぞ」稲倉が得意気に言った。

よし、一区切りついたので休憩させよう。たとえ答えが「2」になるはずの問題になぜかアルファベットで「Y」と解答していたとしても、一区切りは一区切りだ。

「休憩しませんか？」

「その前に、はやく答えあわせしろよ」

俺は誇らしげに書かれた「Y」の文字に盛大にバツをつけた。稲倉が口を曲げてむくれた。

俺は例のきれいな女性が運んできたジュースに口をつけながら、解答をみて首を捻っている稲倉の姿を見つめた。こいつはどうして勉強をやる気になったのだろう。興味は俺の穴という穴から溢れだすほどあるのだが、訊いて機嫌を損ねられては嫌なのでキュツと閉めている。ついでに教えても教えても理解しないこの生徒に、おまえは元が馬鹿らしいから無駄なことはしない方がいいよ、とでも言つてやりたいのだが、これも口に出したら殺されそうなので心の中に閉まつている。

「なんだよ？」稲倉がノートから顔をあげて俺を睨んだ。

俺はなんでもないと首を横に振った。

「おれだろ」稲倉が言った。

だから四文字で全てを伝えようとしなくてほしい。それでもだんだん稲倉語に慣れてきてはいるが、今回ばかりはさすがに分からなかった。

「なにがですか？」

「梶谷じゃなくてさ。おれだろ。おまえが見てたの」

どうやら国語の授業の前のことを言ってるらしかった。俺はどう反応していいか分からずキョドキョドとした。ほんとにこいつの考えていることは分からない。

「おまえのあの視線さ、すげえウザイ」

え？

あまりにも抑揚なく言うので聞き流しそうになったが、稲倉は今俺を中傷したようだった。背筋に悪寒が走った。なんだか知らないが俺は稲倉の機嫌を損ねていたようだ。ああ、ついに今日がXデーか？

「むかつくんだよな」稲倉がキョトンとしている俺に念をおすように言った。「あれって、いじめられてるところを助けてほしいって目だろ？」

胸がズキンと痛んだ。

その言葉を言うな。それは俺の地雷だ。

「違います」俺が声を震わせた。

「いや、そういう目だったよ」

違う、その話じゃない。俺は拳をギュッと握った。汗ばんだ手に爪が食い込んだ。

「おれは、いじめられてなんか、ないです」思いがけず反抗的な声が出てしまった。

「は？」

俺はずっと「いじめ」という言葉を避けてきた。その言葉は「差別」とか「嫌がらせ」とかと違って、俺のプライドをボロボロにしそうだったからだ。いじめられている、という認定は、俺が暴力や中傷を笑い飛ばすスタミナを根こそぎ奪う気がする。だから、俺はいじめられてない、そう思ってきた。

「またプライドか」稲倉が言った。こいつは数学の問題は解けなくても人の心理を読むのはうまいようだ。獣に近いから野生の勘が働くのだろう。「おまえがいじめられるのも、そのくだらないプライドのせいだろ」

カチンときた。稲倉に対する恐怖よりも、怒りの方が上回った。

こんなことは十年に一度、あるかないかの大事件だ。

「知った風な、口を、きくな！」俺は興奮して、相手が稲倉であることも忘れて怒鳴っていた。しかし稲倉は俺の怒声になど眉ひとつ動かさなかった。

「おまえはさ、自分以外の人間は全員クズだとも思ってたんだろ。口に出さなくても態度でバレバレなんだよ。黙りこくって腹ん中で他人を見下す、そういう態度、すげえ腹立つ」

「ふざけるな！」息が荒くなった。こいつ、珍しくペラペラ喋ると思えば好き勝手いいやつだ。

「人を侮蔑しているのは、どっちだ！ お、俺を、笑ってるのは、誰だ！」

「だからさ、それはおまえがあいつらを馬鹿にしてるからだろ」稲倉が冷静に言った。

その言い方がまた癩に障った。こいつは加害者の親玉のくせして、被害者に説教垂れるつもりか？

「最低だ」俺が吐き捨てた。「おまえが俺と関わりあるのを隠して、差別を傍観してるのだって、ホントは仲間に見捨てられるのが怖いんだろ。お山の大将が、聞いて呆れるよな」

「あ？ おい今何だった？」稲倉の語気が荒くなった。「勘違いしてんじゃねえぞ。俺とおまえは別にダチでもなんでもねえ。今言っただろ、俺はおまえがムカツクんだ。助ける義理なんかそもそもねえんだよ」

「だったら、お、俺以外のやつから勉強は教わるんだな！」

俺はカバンを引つ掴むとドタドタと部屋の戸へと向かった。

「おい、待てよ！」

稲倉が俺を呼びとめた。鋭い声に条件反射で立ち止まってしまった。

「おまえ、そのままじゃずっと独りだ」稲倉が言った。「頭のレベルがどうかじゃねえんだよ。おまえが殻に閉じこもって人を馬鹿にし続けるかぎり、高校行こうが社会にでようが孤立するぞ！」

うるさい。
俺は何も言わずに部屋を出た。稲倉のクソ野郎。おじゃましました、なんて死んでも言うか。

やっぱり今日はXデーだった。

部屋のベッドに沈み込み、俺は深い溜息をついた。

稲倉には失望した。結局あいつも、「いじめられている人にも原因がある」とか言っちゃうタイプなのだ。

背広を着たおっさんがテレビ画面の中で、「いじめっこもまた、可哀そうなんですよ」とか「いじめられる方にも落ち度があります

から」とか訳知り顔で言っているのを見ると殺意すら湧く。俺はテレビが十万円以下だったら間違いなく液晶を砕いていた。幸いうちの大型テレビは高級品なのでアホな自称専門家のせいで壊されずに済んだ。

あいつらは何も分かっていない。いじめられるのに明確な理由なんて無いのだ。

俺が人を見下した態度をとっている？ ああ、とっけていとも。当然じゃないか。あんな猿軍団と俺じゃ釣り合わない。あいつらのどこに褒めるべきところがあるんだ。それに逆に訊きたいね、人を見下している人間なら、殴っても蹴ってもいいのかって。

あの悪魔どもは結局、俺に難癖をつけてストレス解消のサンドバツクにしたいだけなのだ。そして差別を続けるうちに元々トロい頭がさらに麻痺して罪悪感を感じなくなる。最低じゃないか。

俺は悪くない。悪いのは全部あいつらだ。

俺は部屋に置いてある空のアルミ缶を手にとった。クラスメイトの姿を重ねてグツと缶を握った。グシャリとすぐに缶はつぶれた。少しすつきりした。部屋の隅へとつぶれた缶を放り投げるとカラーンという音がした。俺の部屋の隅には、奴らの死骸が山のように積み重なっていた。

俺はまたもチャリ置き場で待ち伏せされていた。二日連続で登校待ちされるなんてちょっととしたアイドルだ。相手が男じゃなければもっといいんだけど。

「よう、オタク山くん」

相手が梶谷じゃなければもっといいんだけど。

梶谷は二人の窓際族を引き連れてニヤニヤと笑っていた。猿が三匹、気色悪い笑みを浮かべているのは、放送コードに引っ掛かりそ

うなぐらい醜い光景だった。モザイク忘れてますよ。

「昨日は俺にガンとばしてくれちゃってありがとな。放課後お礼しようと思っただけ帰っちゃうんだもんなあ」

梶谷が言った。俺にとつてのチラ見はこいつにとつてのガン飛ばしらしかった。ただけガラスのハートなんだ。というか俺はそもそもこいつを見ていたわけじゃないので、しつこい上にとんだ勘違い野郎である。

「来いよ」

梶谷が顎をしゃくった。ついて来いという意味らしいが、俺には顎の下がかゆくなつたようにしか見えなかった。精一杯虚勢を張っているのが丸わかりで滑稽だ。

連れてこられたのは技術・凶工棟の隣のゴミ捨て場だった。なるほど、ここなら掃除の時間でも無い限り人が来ない。猿にしては考えたものだ。

「おい、おまえら押さえてろ」

梶谷が指示を出すと男の一人が俺の体をホールドした。もう一人は技術棟の端で見張りをしている。ちゃんと役割も割り振られているようだ。

梶谷が手を組んで指の関節をポキポキと鳴らした。ヒョロツとした梶谷がそれをやると真剣に骨折の心配をしたくなる。威圧のための動作だろうが完全に逆効果だ。

腹に梶谷のパンチが入った。喉がつまる。思ってたよりキツイ。

この野郎、筋力ないからって骨で直接殴るのはやめろよな。

「なんだよその目は」梶谷が眉を上げた。「馬鹿にしてんのか？」

殴るスピードがあがった。二発目がいいところに入った。胃液が込み上げてくる。

吐いたら暴力が激しくなるだけだ。俺は学習する男なのだ。懸命に口を閉じて嘔吐しないよう努めた。

「ぶはっ」

まったく、梶谷は空気の読めない奴だ。

馬鹿の一つ覚えでまた腹を殴ってきたので、俺はこらえきれなくなつて口の中の液体を勢いよく嘔き出してしまった。

「ちよつ！ てめえつ！」

俺の吐瀉物を真正面から浴びて、梶谷はキレたようだった。

腹に強烈な一撃を感じた。目から火花が出そうだ。視界が霞む。

何度も、何度も殴られた。俺の腹はサンドバッグだから、梶谷の怒りがぶつけられるのだ。

口の中に鉄のような味が広がった。血の味だ。

もう強がる気力もねえや。

奇妙な虚脱感と共に、場違いに頬が緩むのを感じた。

誰か、誰か救急車よんでくれ。

「梶谷！ それ死ぬつて！」

「おいおい、やりすぎだろ」

気がつけば俺は地面に横たわっていた。梶谷たちの声がする。さすがに不安になったのだろうか。俺は腫れあがった目を薄らと開け、クラスメイトの姿を見た。

全員が笑っていた。

何が可笑しいんだろ。こいつらは狂っている。だから俺はこいつらを猿と、悪魔と呼ぶんだ。人間がこんなことできるわけがない。

「クソ野郎！」俺は気力を振り絞って声を張り上げた。

黙っているだけのはずの俺が叫んだことに、梶谷は面食らったようだった。

「ああ？」梶谷たちの笑いがやんだ。「なんつった？」

「おまえらみたいなのが、俺を殴るんじゃない！」

一瞬の沈黙があった。

言つてやつたぞ。

妙な解放感あつた。痛みを感じなくなつて、不思議と笑顔になつた。

もういいや、ここで死んでも。

ドカツと鈍い音がした。梶谷が俺にとどめを刺す音だろうか。それにしては感触が無い。

「うわあああ」

男たちが悲鳴と共に走り去っていく。

再びドカツという鈍い音がして、俺の目の前で梶谷が吹っ飛んだ。「な、なんで……」梶谷が尻もちを突いたまま、頬をさすって言った。顔が驚愕のあまり歪んでいた。「なんで俺を殴るんだよ、稲倉さん！」

俺の前に稲倉が仁王立ちしていた。

数学の問題集に苦闘する稲倉とはまるで別人だった。なんだかいつもよりデカい気がする。体のサイズを自由に変える機能が備わっていないのなら、ボスとしてのオーラがそう見させるのだろう。

「終わりだ」稲倉が言った。相変わらずの四文字。稲倉語だ。何が終わりなのかよく分からない。でもその四文字はやたらと心強かった。

梶谷は不満気な顔をしてすごすごと立ち去った。

「大丈夫か？」稲倉が俺を見下ろして言った。かっこつけすぎだ。

「なんで助けてくれたの？」俺が消え入りそうな声で言った。

「聞こえない」

「こいつは鬼か、天然か。」

「なんで助けてくれたの？」大きな声を出すと腹が痛んだ。「俺のこと嫌いなんだろう？」

「ああ、まだ嫌いだな。むかつくし」稲倉が答えた。「でも一步前進したみたいだから、手助けしてやってもいいかと思ってな」

「前進？」

「んや、まあ、自覚が無いならいい」稲倉が言った。

「余計に気になるじゃねえか」

「それより今のは貸しだから、家庭教師よろしくな」稲倉がいけしやあしやあと言った。

そつきたか。意外にしたたかな奴。

「ところで稲倉はおれが殴られてるところを、最初から黙って見たのか？」俺がムスツとして訊いた。

「ああ」稲倉がしれつと言った。「途中まで助けるつもり無かったからな」

「死ね」

「おまえ、予想はしてたけど、本音になると途端に口わりいな」

俺は稲倉に支えられて歩いた。ホームルームには遅刻してまで出る気が起きなかった。第一、こんなナリだ。保健室に行くのを俺が頑なに拒むと、稲倉はトイレの個室に俺を放り込んだ。そして「そこで休んでろ、唾でもつけときやすぐ治る」と言い残して稲倉はトイレから出て行った。

俺もおまえのこと嫌いだけど、ちょっと言いたいことが分かったよ、稲倉。もちろん、唾うんぬんの話じゃないぞ。

俺は壁にもたれかかって痛みが引いていくのを待ち続けた。

底辺と頂点2（後書き）

少し手直ししました。ご感想いただけると嬉しいです。

変わる世界（前書き）

縦書き表示推奨です。

変わる世界

愛原ナギサが結婚した。愛原ナギサと婚約相手が幸せそうにハニカミあっている光景を、俺の部屋のテレビが「現実なんてこんなもんですよ」といった態度で映していた。

クソ野郎。俺はナギサちゃんの横で鼻の下を伸ばしている男を睨みつけた。俺の憎しみが公共の電波を逆流して男に届くようになり集中した。それでも男は「ナギサは甘えたがりで子供っぽくて、法的に結婚できる年齢になっているか、ときどきわからなくなりますよ」などと報道陣に笑顔でノ口けていた。

俺が藁人形と釘を探しているうちに、いつの間にか五時になっていた。稲倉のところへ家庭教師に行く時間だ。俺はテレビを消し、部屋の壁で微笑んでいた水着姿の愛原ナギサを押し入れに放り込むと、急いで玄関を出た。

「愛原ナギサ？」稲倉が首を傾げた。「AV女優か？」

「違うって！」俺が声を荒げて否定した。「ほんとに知らないの？最近はどうなドラマ見ても出演してるじゃんか。ほら、『巡査のおしごと2』とか。超ミニの制服着てさ」

俺が熱弁をふるっても稲倉は理解していないようだった。愛原ナギサといえば男子中学生なら誰もが下半身を疼かせたことがあるほどの有名人なのだが。

「おれ、テレビ見ないし」稲倉が興味なさそうに言った。

「おまえ、勉強ばかりしているとよくないぞ！」

なんで成績一位の俺が、校内一の不良で名が通っている稲倉にこんなこと言わなきゃならないんだ。俺は愛原ナギサがいかに美しく、エロく、魅力あふれる大根役者であるかを唾を飛ばして力説した。次から次へと言葉が出た。家庭教師を頼まれて稲倉と喋るようになったおかげで、少し舌のまわりが良くなったようだ。

「うるせえ」稲倉がたまりかねたように言った。「いいから、さっさと数学教える」

「そろそろ稲倉の逆鱗に触れそうだったので俺は口をつぐんだ。

なんだか体が温かかった。こんな風に自分の好きな芸能人のことを誰かに話したのは始めてだ。たとえ相手が死刑囚みたいな男だつて、俺の話を全く聞かずにぼりぼりとケツを搔いていたつて、じんわりとした喜びが俺の胸に広がる。

「目立たなくなったな」稲倉が言った。いつの間にか俺の方を向いている。

「え？」俺が訊き返した。「あのさ、稲倉、前から言おうと思つてたけど、おまえ決定的に主語が足りないよ」

「主語？」

「国語の勉強も足りなさうだな」

俺が溜息をつくると稲倉が顔をしかめた。

「そろそろ俺も怒るぞ」

「あ、すみません、つい」俺が慌てて謝った。「それで、何が目立たなくなったつて？」

「おまえの顔」

俺の顔、の、殴られた跡のことか。稲倉の言葉を自己補填した。

「思ったより腫れはすぐひいたんだ。殴られ慣れて回復力があがつてんのかも」

俺は梶谷に殴られた頬をさすつて答えた。

あのあと、俺はホームルームを終えて職員室へ戻ろうとする沢木をつかまえ、具合が悪いので早退させてくれと頼んだ。沢木はボロボロになった俺の顔を見てハッと息を呑んだが、俺が階段から落ちたと説明すると「あ、そうなの。お大事にね」と言つてスタスタと歩いていってしまった。いくらダメ沢木でもこんなベタベタな言い訳を本気で信じたはずがない。俺の顔にいじめの、それも暴力的な世界を感じて怯えたのだろう。知らなかった、気づかなかつたで逃げようとしているのだ。

教師にも見捨てられた俺を救ったのが、いじめの加害者である不良の親玉とは、運命の歯車はサビついてギイギイと逆回転しているようだ。

「今日は助けてくれてありがとう」俺は心から稲倉にお礼を言った。

「あと、死ねって言うてごめん」

「べつに」稲倉があくびしながら言った。「思ったことは言えばいいだろ」

きっとそれが稲倉の道徳律なのだろうな、と俺は納得した。言いたいから言う、気にいらなから殴る、興味がないからケツを搔く俺を助けたのだって気まぐれみたいなもので、こいつは決して正義の味方なんかじゃない。明日にはこいつは何事も無かったのように俺を殴り始めるかもしれない。いじめられっ子の立場から言えば、やっぱりこいつのことは好きになれなかったが、でも稲倉は他の奴らとは何かが違う気がした。

「なあ、思ってることがあるから言うけど」

「なんだ？」

「やっぱり分からないんだ。稲倉が俺を助けた理由が。稲倉は俺のこと嫌いみたいだし、俺をいじめている奴らのボスなんだぞ。接点だって、こうして勉強を教えてやってることだけだし」

「さあ」稲倉が言った。「おれも分からねえ」

「なんだよそれ」

「たぶん、おまえが殻を破ったのに感動したからかな」

「おれはヒヨコか？」

「そうだな、おれはなんか、親鳥の気分」

まったく意味がわからない。話を通じ無さそうなのでこれ以上訊くのはやめた。

俺は稲倉が解答し終わった問題集を採点した。二次関数の証明問題への解答は途方もなく迷走していて、京都を目指せと言われたのにアフリカの草原に行っちゃいました、という感じだった。どうやって海を渡ったのか知らないが、稲倉には泳いで太平洋を横断する

ぐらいわけないようだ。やっぱり話しが通じなくて当然だな。俺は赤ペンで大きくバツをつけた。

翌日、俺が登校すると、教室の空気がいつもと違っていた。やっぱり思春期真っ盛りの猿どもにも愛原ナギサの結婚はショックだったのかと思っただが、どうやら奴らが噂しているのは俺と稲倉の関係についてらしかった。婚約会見を開いた覚えは無いので、昨日の梶谷との一件が広まったのだろう。

別段聞きたくもないのに俺の耳が条件反射で猿どももの陰口を拾った。常に聞き耳をたてて生活してきたせいで、変な癖がついてしまっているのだ。

拾った情報によると、奴らは稲倉が俺をかばった理由についてあれこれと推測しているようだった。俺と稲倉はホモで恋人同士なのだとか、実は稲倉には考えがあって俺の救出劇を自作自演したとか、拳句の果てには俺が黒魔術を使って稲倉を操っているというオカルト説まで出ていた。どれも馬鹿げた話だ。俺に黒魔術が使えるならナギサちゃんの婚約者に使っている。

「稲倉さん」

梶谷が苦い顔で挨拶していた。眠そうな稲倉が肩に鞆をかけてノシノシと教室に入ってきたところだった。

「おっ」

稲倉はあくびまじりに答えるとドシンと椅子に座った。まるで昨日のことなど覚えていないかのようだ。あるいは本当に覚えていないかもしれない。稲倉はまだ頬が腫れている梶谷を一瞥しただけですぐにどうでもよさそうに視線を逸らした。

梶谷はヒクヒクと引き攣った顔で何か言いたげにしていたが、結局口を開くことなく正面に向き直った。小心者の金魚のフンには勇氣という物が無いようだ。

不思議だ。普段ならすでに一発殴られてもおかしくないのに、

今日の俺は無傷だ。

噂のおかげで、俺への暴力が止んだらしい。俺と稲倉になんらかのつながりがあると知ってなお、手を出してくる者はいないようだ。稲倉のささいな行動で俺の生活がここまで変わるのかと思うと、俺は驚くと同時に馬鹿馬鹿しかった。

もつとも、いじめの種類が暴力から徹底的な無視へと変わったただけで、俺への差別は続いている。腫れものにさわるように、猿どもは俺の背後に稲倉の姿を見てとって避けていた。俺にすら「おまえ稲倉とどんな関係？」と訊いてくる者はいなかった。仮に訊かれたとしても「成績の良さを買われて家庭教師してます。たまにディナーにも誘われます」としか答えられないし、信じる奴はいない気がする。ともかく、体を痛めずに済むようになったのは大きな改善だ。

同日、一時間目。

教壇では今年六十歳になった日本史教師の細萱が、織田信長の天下統一について話していた。名将信長の壮大なドラマを、ご丁寧に面白みを一切排除してから、機械のように教えてくださっている。細萱がバラエティ番組の司会をやったら、視聴率0も夢じゃないだろう。

俺の頭には教科書の文字も細萱のお経も入ってきていなかった。五時間目のホームルームのことで頭がいっぱいだ。憂鬱さに胸やけがした。不安と緊張にモヤモヤしていると、気がつけば五分や十分は軽くなった。時間の進み方が不自然に早い。

あつという間に日本史の講義も終わり休み時間になった。俺は眠くも無いのに腕を組んで机に伏せた。寝たフリをして目を閉じると聴覚が研ぎ澄まされてくる。猿どもの耳障りな笑い声が鬱陶しい。

ああ、嫌だ嫌だ。修学旅行なんて。

今日の五時間目のホームルームは修学旅行の準備だった。いまいましい。修学旅行なんて旅行業界と学校の癒着じゃないか。風呂、飯、バス移動、自由時間、およそ考えられる憂鬱な要素を凝縮した最悪のイベントだ。

「それじゃあ、六人一組で班を作つてね」

沢木が悪魔の指令を出した。俺の背中を嫌な汗が流れた。席替えと同じ、いやそれよりもっとひどい。ここで決まったグループで沖縄を三泊四日も旅行しないといけないのだ。不良グループに入ったら最悪、体育会馬鹿のグループなら最低、虚勢で生きる媚び人間グループならワーストだ。どこに入る確率が高いかは分からない。どこからも誘われないから。

猿どもがわあつと一斉に動いた。どいつもこいつも、はみ出さないように必死だ。一人になるのがそんなに怖い。あつという間にいくつかの猿軍団が出来上がった。

「ちよつと、誰か奥山くんを入れてあげて」沢木が困惑したように言った。

ああ、こういう同情が一番ウザイ。俺だつてこいつらと旅行に行くなんてゴメンだつっの。

「このクラスでの最後の思い出になるのよ。仲良くしましょうよ」

俺は座つたままこの状況に決着がつくのを待つしか無かった。精一杯涼しい顔を作ってみるものの、手はどんどん汗ばんで言った。時計を見た。まだ三分しか立っていない。急に時間の進み方が遅くなつたように感じられた。

「あなた達はまだ五人ね」

沢木が窓際を指さした。稲倉や梶谷のいる不良グループだった。このババア、とんでもないジョーカーを引きやがる。

「奥山くんを入れてあげてくれない？」

「はあ？」男の一人が不満げな声を出した。「ありえねえだろ」

「せ、瀬尾くん。そんなこと言っちゃダメよ。奥山くんがかわいそうでしょ」

沢木の語気は弱弱しかった。瀬尾は不良グループの中でも実力者だ。体格は稲倉に劣っているが、顔はもつと趣味が悪い。性格が顔に出るといふ説を、瀬尾の惨忍な顔を見ると信じることができる。沢木が歯が立たないのも当たり前だ。

「そいつと一緒になんて恥ずかしくて歩けねえし」

「でも。六人一組だから」沢木がほとんど泣きそうな声で言った。

「あーウゼエ」瀬尾が吐き捨てた。「だったら、中村、おまえこっち来いよ」

「俺かよ」中村が嫌そうに答えた。体育会系グループの一人だ。豪胆な性格は不良グループからもウケがいい。中村はギロツと俺を睨むと不良グループの方へ行った。

「これで六人」瀬尾が言った。「で、オタク山はあっち、それでいいだろ」

「え、まあ、それならいいけど」沢木が言った。結局この女は形だけでも丸く収まればいいと思っっているのだ。体育会系グループにできた一枠に俺が入ったところで、何の解決にもなっていないのに。どこに入っても俺の扱いは同じなのだ。

瀬尾が話している間、稲倉は何も言わなかった。梶谷はチラチラと稲倉の動向を窺っていたが、反応が無いのを見ると瀬尾と一緒に俺を拒否し始めた。あんな小物つぶりで不良なんて笑っちゃうな。

「俺だって、おまえらなんかと一緒になんてありえないから」

気がつくとき心の声が見ついて出ていた。

教室内がシーンとした。稲倉だけが愉快そうにクツクツと含み笑いをしていた。

ざわざわと猿どもがどよめき始めた。

「いまのオタク山が言ったのか？」

「なんかキャラ違うね？」

俺は席をたつて雑音の中を体育会グループが集まる場所へと移動した。運動バカたちは俺を汚い者でも見るかのように一瞥したあと、

完全に無視するように決めたようだった。稲倉と俺の噂のせいで、悪態をつきたくてもつけないのだろう。

俺は仕方なく運動バカたちから一つ離れた椅子に座った。特にすることもなく、沢木の視線に耐えながら時間が過ぎるのを待った。隣でバカたちが笑いあっているのが俺をイラだたせた。一秒が一年に感じられた。

「おまえ、行くつもりなわけ？」

「え」

唐突な質問に眠気でボンヤリとしていた意識が覚醒した。危なかった。稲倉の部屋のフローリングによだれを垂らすところだった。

「なに？」俺が訊き返した。

「だから、修学旅行行くつもりかって」

「行かないなんて選択肢はないだろ」

俺が言うと稲倉はシャーペンを問題集の上に放り出し、両手を広げて体を伸ばした。

「おれは行かねえぞ」

「え」俺が目を丸くした。

「だから、修学旅行」

「あ、いや、それは分かったけど。なんで行かないの？」

稲倉の言い出すことはいつも予想がつかない。全くこいつと話すとは倍は疲れる。こいつ以外と喋らないから比較対象は無いけど。

「なんで行かないかって？」

稲倉が眉をよせて考え込んだ。なんでおまえが考え込むんだ。自分のことだろ。

「行きたくねえからだな」

結局、稲倉からはなんの答えにもなっていない返答が返ってきた。

ポットに「ポットかよ！」と突っ込みを入れるのと同じだ。でもサンサンと輝くビーチではしゃぐ稲倉より、自分の気持ちの赴くまま

修学旅行の欠席宣言をする稲倉のほうを受け入れやすかった。こいつはそういう奴だ。

「おれだって、行きたくないけどさ」俺が息を吐いた。

「じゃ、行かなきゃいいだろ」

「簡単に言つなよ」俺はムツとした。「そんなことしたら、親がどう思うかわからないし」

「まだいじめられてること言っただけかねえのか？」

「ああ」

「バレてるだろ」

「それはない」

うちの親は鈍感なのだ。息子が制服を吐瀉物で汚して帰ってくるのは体が弱いせいだと思っただけで、気づかれないように体の傷は隠し続けている。このまま俺がいじめられていることなんて知らせない。同情はごめんだ。

「休めよ。親に見栄はって行くことねえだろ」稲倉が言った。「そんで、おれと北海道に行こう」

北海道？ 稲倉と二人で？ どうも話がぶっ飛び過ぎている。どういつ思考回路してんだ。

「意味がわかんない」

「だから、修学旅行に行くフリしておれと北海道に行けばいいんだよ」

「いや、だから、おまえと二人で旅行する意味がわかんないの」

「そんなら、学年全員で旅行する意味の方がわかんねえだろ」

たしかに。

じゃなくて、それとこれとは違う話した。稲倉の妙なペースにいつの間にか巻き込まれてしまう。

「行くつぜ。あいつらと沖縄よりよっぽどいい」

稲倉の目は真剣だった。薄々気づいていたが、こいつはあのクラスが、あの学校が嫌いなようだった。一番強い者であることと、幸せであることは違う事象なのだろうか。

「考えとく」

つい気圧されて言ってしまった。押されて押されて土俵際に追い詰められ、そのまま寄り切られたようだった。稲倉がニツと笑った。何かを企んでいる顔にしては爽やかすぎる笑顔だった。

しかし修学旅行サボリ計画はあっさり佳境を迎えた。

沢木の馬鹿が「修学旅行参加確認証」を配ってきたのだ。参加するかしないか書いて親のサインをもらい、参加しない場合はその理由を書かなければならなかった。神様、どこまで俺を追いつめる気ですか。

「とりあえず『行く』にして親のサインもらえばいいだろ」

稲倉がなんでも無いように言った。稲倉の部屋は、すっかり俺たちの歓談スペースになっていた。

「いや、それで当日休んだらきつと親にも連絡がいくよ」俺が反論した。「それに冷静に考えてみれば中学生二人が平日に旅行してたら補導されるかもしれない。それで親に電話されたらアウトだ」

「親が、親がつてさあ、おまえマザコン？ ファザコン？」

「どっちでもないよ」

ただ、どうしても親には知られたくなかった。心配をかけまいとしているんじゃない。あんな能無し親に憐れみの目で見られるなんて俺が耐えられないのだ。

「じゃあ、工作するしかないな」稲倉が不敵に微笑んで俺にペンを渡してきた。

「欠席？」

沢木が面食らったように言った。俺が渡した参加確認証を疑わしげに見つめている。

「はい、経済的な事情で」

俺は出来るだけ自然に聞こえるよう努力して言った。心臓がバク

バクいつていた。俺の目がつい参加確認へと向く。親のサイン欄には、紛れもなく俺が書いたサインがあった。

あんまりマジマジ見るな。筆跡は変えたつもりだが、うまく書けた自信は無い。真似ようと意識すればするほど、自分で書く親の筆跡は作り物くさい出来となった。

ええい、キヨドるな。堂々としていれば犯罪はバレないものだ。

「わかりました。残念だけど、仕方ないわね」

沢木はまだ少し不審に思っているようだったが、諦めたように言った。よっしゃ、俺の勝ちだ。教師一人だますのなんて軽いもんだ。この女だって俺が来ない方が厄介ごとが無くなってありがたいだろう。

ああ、こつもあつさり憂鬱が解消されるとは。行動力って大事なな。

前言撤回しよう。俺の考えが甘かった。

俺が家に帰ると、お袋が険しい顔で待っていた。

「たくちゃん、ちょっと話があるの」

これは、バレたな。沢木のやつ、告げ口しやがった。

俺とお袋はリビングのソファに向かい合って座った。いつもすぐに自分の部屋へ向かっていたから、この真つ赤なセンスの悪いソファに座ったのも久しぶりだった。お袋の顔をまともに見たのも。

「今日、先生から電話があつて、たくちゃんが修学旅行を欠席するつて言つてるつて」

お袋が吐息まじりに言った。急に老けこんだようだった。白くならはじめた髪と顔中のしわが存在感を増したように見え、痩せた体は掴めば折れてしまいそうだった。

「ああ、うん、だつてほら、おれ勉強したいし。大金払つて四日間も遊びまわるなんて馬鹿みたいじゃん」

訊かれてもいないのに言い訳が出た。喉がカラカラに乾いていた。まばたきもいつもより多い。

「勉強？」お袋が目を細めた。「先生ね、経済的な事情が欠席の理由だって」

「だからさあ、勉強したいから、なんて理由じゃ認められないだろう？ ちよつと嘘ついたんだよ」

俺は笑いながら言った。「冗談っぽく聞こえるといいな。でも口元が引き攣ってしまった。」

「お母さんのサインまで嘘ついて書いたの？」

「うるさいな、だから悪かったって」

ああ、イライラする。大人は何も分かっていない。

「たくちゃん」お袋が静かに言った。ソファアを立ちあがって俺の方へ向かってきた。顔が青ざめている。これは怒鳴られるな。まあ別に構わない。こんな間抜けな親に怒鳴られたところで痛くもかゆくもない。

でもお袋は俺を叱りつけたりしなかった。

代わりにギュツと俺を抱いた。

「いじめられてるんだって？」

ガラガラと自分の立っている足場が崩れていく気がした。頭の中が真っ白になる。

知られてしまったのだ。

ちきしよう。

ちきしよう。

こんなウスノロの親に同情されるなんてまっぴらだ。

「沢木が言ったの？ あいつ勘違いしやすいんだよな。おれ、いじめられてなんかかないよ。まあ、たまにふざけてからかわれることはあるから、それをいじめだと思ったんじゃないかな」

声が震えた。これじゃ説得力が無い。沢木め、親にチクって俺の助けになるとでも思ってたのか。むしろ不快なんだよ。

お袋が手に込める力を上げた。俺の体が温かい感触に包まれた。

「違うの。先生は、修学旅行の出欠について連絡してきただけよ」

え？

「ごめんね。もうがんばらなくていいから」

お袋が優しい声で言った。

「だから、泣かないで、たくちゃん」

あれ？

俺の頬を生温かい液体が伝っていた。口の中がしょっぱい。鼻をすすってもすすってもズビズビと鼻水が垂れてくる。

「お袋」

気づいてくれたんだな、と言おうとして先が言えなかった。喋ろうとしたら涙をこらえる力がゆるんでしまって、嗚咽で言葉が出せなくなってしまうのだ。お袋の腕の中で、俺はしゃくりあげて泣いた。中学に入ってから、俺が泣いたのは始めてだった。

ああ、俺は本当は気づいてほしかったんだ。傷ついた心に共鳴して欲しかったんだ。プライドを捨てればこんなに楽になれる。

「修学旅行の日、おれ、北海道に行くんだ」

目をこすりながら俺が笑った。

「北海道？」お袋は驚いたように俺を見つめた。「一人で？」

「うん」俺が首を横に振った。「友達と」

お袋は今日始めて笑顔を浮かべた。

「そう」

「うん」

「そうなの」

「うん」

お袋はまた泣きはじめってしまった。今度のは悲しみの涙では無さそうだった。

変わる世界（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
ご指摘・ご感想よろしくお願ひします。

越えていけ(前書き)

縦書き表示推奨です。

越えていけ

十一時二十分、羽田発千歳行き四十七便は、両翼を大きく広げて澄み渡った初秋の空へと飛び立った。俺と稲倉の二人だけの修学旅行。北の大地、北海道への三泊四日の逃避行。四十七便は乗客の高揚を機体に染み込ませ、力強くエンジン音を響かせていた。

俺と稲倉はそれを展望ラウンジから眺めていた。

「信じられない」

俺は口をあぐりとさせて、乗る予定だった飛行機が小さくなつていくのを見つめていた。

「な、あんな鉄の塊が浮くんだな」

稲倉が手すりに凭れかかったまま言った。

「いや、そうじゃなくて、おまえがチケット予約してなかったことが信じられないの」

「人任せはよくない」

この野郎。いきなり計画が崩れたんだぞ。ちょっとは焦れよ。

そもそも北海道旅行の言い出しっぺは稲倉だ。

俺が親の同意を得て計画の実行が決まった直後、稲倉は「北海道な、羽田発十一時二十分のやつで行くから」と言った。そんな風に言われたら、普通は二人分の席を予約してくれたんだと思うじゃないか。

手際によさに感心して俺は「ああ、ありがとう」と感謝の言葉まで言った。チケット予約してなかったんなら、なぜ稲倉は「気にすんなって」と鼻高々に答えたのか。ご満悦そうな顔を思い出して憎々しくなる。

結局、搭乗手続きの時にあって、俺たちに乗車の権利が無いことが発覚したのだった。啞然としている俺の横で、「ああ、席、空い

てなかったか」と稲倉が言った。電車に乗ってボックス席の空席を確認するみたいない方だった。絶対こいつは飛行機を誤解している。俺は「じゃあ立ってますから」と空港職員に交渉する稲倉を引っ張って羞恥の場から逃げ去るハメになったのだ。

行楽シーズンなのか、北海道にビートルズでも来るのか知らないが、千歳行きはどの飛行機も満席だった。なんとか空席があったのは夜の八時の便だけで、俺たちは思いがけずモラトリウムへと突入することになった。それでこうして展望ラウンジでダラダラと時間を潰しているわけである。

「あと八時間もあるぞ」

俺がげんなりして言った。本当なら北海道で過ごすはずの八時間を、こんな通過するためだけにあるような場所で浪費しないといけないなんて馬鹿らしい。

「空港も面白いだろ」

稲倉が言った。いい気なもんだ。何事にも動じないスタイルは尊敬はするが憧れはしない。たぶん、馬鹿ゆえに身に着いたスタイルだから。

「八時間も楽しませてくれる魅力がどこに潜んでるんだよ」俺が溜息と一緒に不満を吐きだした。

「周りの奴らとか」

周りの奴ら？

俺は展望ラウンジを見渡してみた。ドア付近では家族連れや男女の二人組などが入れ替わり立代わり出入りしていた。しかし俺たちがいるような奥まった部分になると、明らかに雰囲気が違う。手にバズーカのようなカメラを持った男たちが熱っぽい視線で滑走路や整備場を見つめているのだ。

「飛行機オタクっていうんだろ、あいつら」

稲倉が、俺はこんな専門用語も知ってるぜ、という感じに言った。どうしてこう何をするにつけても得意気になれるのか不思議だ。

飛行機オタクたちは俺たちの周囲からあからさまに距離をとって陣取っていた。俺たち、というよりは稲倉を避けているのだろう。指名手配犯か何かに思われているのかもしれない。

「まあ、ちよつと面白いけど」俺が少し認めた。稲倉を恐れている人間を客観的に見るのはいい気分だ。「でも、さすがに八時間潰せるほど面白くはない」

「そうか？」稲倉は楽しそうだった。「あんなインドア派っぽい奴らが真つ黒に日焼けしてんだぞ。きつと暇さえあればここに来てんだろうな」

どちらかといえば色白が似合いそうなバズーカ男たちは、肌が日光で焼かれて黒い色素が皮膚の奥まで入り込んだようだった。短期間での焼け方ではない。屋根がなく、サンサンと陽が照りつける展望ラウンジで、何日もかけて焦がされ続けてきたのだろう。でも、だからどうしたということもない。

「日焼けがそんなに面白いか？」

「ああ」稲倉が頷いた。「肌が黒いやつは生まれつきの色黒か体育会系の野郎だけだと思ってたんだ。こんなインドア趣味でも焼けるなんて思わねえだろ」

はあ、俺が曖昧に相槌を打った。

「すげえな。こんなところにも、ここだけの世界があるんだな」

そう言って稲倉はバズーカ男たちのテリトリーを眺めまわした。

何人かのバズーカ男たちがヒツと肩を震わせた。たぶんガンを飛ばしているように見えたのだ。

俺は愉快そうにしている稲倉の顔をボンヤリと見つめた。いつになく機嫌が良さそうだ。十文字以上喋るし。

「あ、飛ぶぞ」

バズーカ男の一人が言った。アロハシャツを着て無線を持っている男だ。

ゴオという大気の唸り声があがり、銀翼の鳥がまた一羽飛び立った。カシャコン、カシャコンと男たちがバズーカを打ち始めた。

「いつてらっしやーい！」

アロハシャツを着た男が手を振った。無線持つてるし、実は空港関係者で仕事中的なかもしれない。アロハシャツの職員がいればの話だが。

「飛んだぞ」

稲倉も興奮しているようだった。バズーカ達の熱気にあてられて、飛行機好きが伝染したみたいだ。

「無事着くといいな」稲倉が飛行機を見つめたまま言った。

「というか、おれたちが無事につくかのほうが怪しい」他人の心配をしている場合ではない。「そういや、もしかして宿も予約してないわけ？」

「あ？」稲倉が不満げに言った。「なんでおれがそこまでしなきゃいけないんだよ」

やっぱり。後悔先に立たず。稲倉は脳内で計画を練っただけで、下準備というものはまるですてないようだ。俺が予約しておくべきだったのだ。

「腹減ったな。なんか食おうぜ」

人の気も知らないで、稲倉は腹をさすっていた。あまりの傍若無人っぷりにもう言葉も出ない。力が抜けた体で俺は頷いた。

羽田空港の二階にあるフードエリアには世界各地の食べ物が並んでいた。稲倉に言わせれば、「ジャスコみてえ」らしい。俺たちの地元は下町で、デカイ店と言えばジャスコなのだが、恥ずかしいので二度と口を開かないでほしい。

料理はトルコ、ベトナム、韓国、どれも旨そうでどれも高かった。俺たちはやっこのことで空いている席を見つけて荷物を置くと、稲倉が食べたいと言ったベトナムのフォーを注文しにいった。各店でトレに乗った料理を受け取り、共用の椅子が並んだスペースで食べる仕組みだ。

「あんまりうまくない」稲倉が顔をしかめて言った。
「そう?」

俺の鶏肉のフォーは結構うまい。何を血迷ったのか、稲倉が生春巻きを頼んだのが悪いのだ。カレー専門店ハンバーグドリアを頼むような変化球は、概ね失敗することが多い。

「おまえがフォー食べたって言ったのに。なんで生春巻きなんだよ」

「別に。フォーが食いたいわけじゃなかったし」

「はあ? ついに三歩歩いたら記憶を無くすようになったか。」

「ほら」稲倉が顎をしゃくった。「あの店の姉ちゃん、美人だったから」

俺は先ほどのベトナム料理店に目を向けた。専用の制服を着たレジ係の女性は、たしかに愛嬌はあるが、いうほど美人には見えなかった。女つ気のない男子校生なので、持て余された性欲がフィルタをかけているのだろう。アヒルも白鳥に見えるのだ。もしくは稲倉は母親が美人すぎて美的感覚が狂っているのかもしれない。

「そうでもないけど」

俺が冷めた声で言うとうと、稲倉は気分を害したようだった。眉を吊り上げて俺を睨んできた。

「てめえのセンスの方がわかんねえ。なんだよ、愛原ナギサなんてただのガリじゃねえか」

「なんだと?」

俺も思わず睨み返した。ナギサちゃんを寿司のフロクみたいに言うとは。が、すぐに冷静になって目を逸らした。やめておこう。これから二人で旅行するのに、険悪になりたくない。それも喧嘩の理由が女のタイプの食い違いなんて、下半身で動く猿どもと同じじゃないか。第一、喧嘩になったら俺が稲倉に勝てるわけがないのだ。

俺が視線を逸らしたことで間接的に負けを認めたことになった。

稲倉も機嫌を元に戻したようで、生春巻きをさも嫌そうに食べる作業を再開した。

「そついや、来るみてえだな」稲倉が言った。

「誰が？」

「愛原ナギサ」

俺は飲みかけていたスープを嘔き出しそうになった。気管支を守ろうとして反射的にゲホゲホと咳き込んだ。

「きたねえな」

「ナ、ナギサちゃんが羽田に来るの？　なんで？」

「なんでって」

稲倉が壁に張られたポスターを指さした。「愛原ナギサがミニモンフェスタにやってくる！」との文字が躍っていた。羽田空港では今、ゲームが大ブームとなったミニマムモンスターのイベントが開かれていた。そして今秋公開のミニモンの映画の声優に、愛原ナギサが起用された関係で、特別ゲストとしてイベントに出演するらしいのだ。

「三時からだな。あ、じゃあ見れるじゃん」

俺は興奮して体が熱くなった。稲倉、グツジョブ。飛行機に乗れなかったおかげで俺は一生の思い出を作れそうだぞ。

「結婚したばっかなんだろ？　仕事なんてかわいそうだな」

同情の言葉を述べたくせに、稲倉は全く興味がなさそうだった。

というか結婚の話題をサラッと出すんじゃない。ファンの傷口に丁寧に塩を揉みこんでくるな。

「やっぱナギサちゃんの生きがいは仕事なんだよ」

「ふーん」

稲倉は何か言いたげにしていたが、口を開くのも面倒と言った感じで食事に戻った。ここまで嫌なものを分かりやすく嫌う奴は珍しい。稲倉がコマースシャルをやれば、日本から生春巻きは追放されるだろう。

ミニモンの映画の宣伝映像が、また最初から流れ始めた。備え付

けられた中型のスクリーンの中で、主人公の少年が赤道直下よりも熱いセリフを叫んでいた。二十回目までは数えていたが、もう何度聞いたのか分からなくなった。

俺は出発ロビーの端っこに設けられた、ミニモンイベント会場に突っ立っていた。愛原ナギサが来るのだ。場所とりで二時間前待機は当たり前だ。

周りにはさすがに小学生以下の子供ばかりだったが、チラホラと年長のお兄さんも見受けられた。その中に明らかに三十歳は越えていそうな、頭髪が脂ぎった細身の男がいて、何を勘違いしてるのかナギサちゃんの顔がプリントされた団扇を持っていた。俺も人目が気にならないわけじゃなかったが、あいつよりマシ、あいつよりマシ、と呪文のようにつぶやいて気持ちを保っていた。欲望にまみれたオッサンから純粹な子供まで、人種のサラダボールよろしく、様々な思念が会場に渦巻いていた。

「おい、またおまえの仲間が来たぞ」

稲倉が後ろを見ながら言った。ジャガイモみたいな顔をした大学生ぐらいの男が、デジカメ片手にやってきたところだった。メーカーインは仮設ステージの前に来ると文庫本を取り出して読み始めた。明らかにミニモンより愛原ナギサが狙いだ。

「愛原ナギサってのはすげえな。こんなとこまでファンに来させちまうのか」

稲倉はナギサちゃんに興味が無いくせに、俺と一緒に特別ステージまでの待機戦に参戦していた。いわく「周りの奴らを見てるとおもしれえ」らしく、ファンの世界そのものに興味があるようだった。俺としても稲倉を引き連れているだけで周囲に人が寄ってこないの で便利だった。

大きなお友達と子供たちの割合が一对一ぐらいになり、子供たちの親が「おや、なにやら異様な雰囲気だぞ」と気づきはじめてころ、会場がどよめき始めた。

「なにかあったのかも」

俺は妙な不安を覚えた。場所とりをしていた同胞たちの何人かが、顔を青くしてどこかへ駆け出していつていた。

「きいてみればいいだろ」

稲倉が親指をクイツと立てて、後ろに立っていた大学生くらいの男を示した。

「あ、うん、そうだな」

俺は大学生を観察した。服装はそこそこ洒落だ。髪にはワックスが使われている。これは俺より格上だぞ。

「なにやっつてんだ？ 早く聞けよ」

「え、ああ……」

また体が嫌な汗を掻きはじめた。やっぱりダメだ。見ず知らずの人間に声をかけるなんて。

「じれったいな」稲倉がたまりかねて言った。「よう」

稲倉が大学生ににじり寄った。携帯をいじっていた大学生はビクツとして一步後ずさった。稲倉は大学生に思われてもおかしくないし、組長の実の息子に思われてもおかしくない。やや身長で上回っている大学生は、あつという間に自分の階級が稲倉より下であることを悟ったようだ。

「な、なんですか？」

「なんか騒がしいけど、なんかあったのか？」

ちよー上から視線だ。こんな教育をした親の顔が、天女のような美女だとは誰も思わない。

大学生はキョロキョロと辺りを見回した。

「そっぴやそっぴですね」大学生は今気づいたようだった。「あの、何かあったんですか？」

さらに後ろにいたメガネの男に訊ねた。メガネの男は青い顔でパクパクと口を動かしていた。

「あの、聞いた話なんで、分からないし、信じられないんですけど、なんか、その」

うるたえているメガネの男に稲倉の眉がピクツと動いた。俺は稲

倉の服を掴んだ。馬の手綱を引く要領だ。

「その、ですね」

メガネの男が続けた。

「ナギサちゃんが、飛び降りた、とか」

頭の中が真っ白だった。それでも体は走り続けていた。

ナギサちゃんが、飛び降りた。

到着ロビー横、吹き抜けになった階段部分。そんなところにバンジージャンプの設備はない。ましてやプールの飛び込み台もない。

愛原ナギサは、硬い床へと三階から飛び降りたのだ。

人だかりが見えた。空港警察の姿もあった。

「下がって、下がって！」

これが下がってなんかいられるか。俺は人ごみを掻きわけて前へと進もうとした。

「なにすんだよ！」

頭の悪そうな野次馬おとこが俺をはじき返した。こんちくしょう。

「なんだその目は？」

男が睨んできた。うるさい。通せ。ナギサちゃんの一大事なんだ。

「通せよ」

冷たい声がした。稲倉の声だ。俺の後ろで、稲倉がキッと男を睨んでいた。男ばかりか俺の方までぞくつとした。こいつ、こんな顔をするんだ。人生で見えてきた中でもっとも鋭い顔つきだった。

男は稲倉に気圧されて不平を言いながらも場所をあけた。

前へ前へ。

警官が足止めしている最前線までいくと、俺の目に飛び込んできたのは青いビニールシートだった。ビニールシートの下にふっくらとした人間の膨らみがあった。神様、あそこにいるのが、どうか、ナギサちゃんじゃありませんように。

「自殺？」

「ねえ、死んだの愛原ナギサらしいよ」

「うっそお」

野次馬の声が右耳から左耳へと抜けていった。神様、どうかこれが不謹慎なサプライズ演出でありますように。

「おい」

俺の肩が誰かに叩かれた。振り返ると稲倉がいた。

「行こう」稲倉は俺を静かに見つめた。「行こう。泣くなよ」

俺は稲倉の後についてその場を離れた。最近泣いてばかりだ。人の死を見たのはそれが始めてだった。

放心したままロビーの椅子に座っていた。もう二時間もたったのか。思考停止こそが究極の暇つぶしらしい。

空港はマスコミや野次馬で騒然としていた。愛原ナギサの遺体は運ばれ、現場は処理された跡だったが、名所旧跡を紹介するようにリポーターが愛原ナギサの自殺現場を指さしていた。

自殺現場？ そうか。自殺、したのか、愛原ナギサは。

黒魔術でも使わない限り、人に柵を越えて飛び降りさせることなどできない。他殺の線は考えられなかった。信じられない。結婚して、幸せの絶頂だったんじゃないのか？

「なあ」

稲倉が話しかけてきた。稲倉はいままで俺の隣で何をするでもなくどこかを見つめていた。ファンでもなくせに、放心する権利なんかおまえにねえんだよ。

「おい、なんか言えよ」稲倉が言った。「おまえ、ホントに行かねえのか？」

俺はこくと頷いた。稲倉が顔をしかめた。

「北海道行かないでどうすんだよ？ このまま帰るのか？」

再び首を縦に振った。

「せっかくここまで来たのに」

「どうせ宿も予約してないくせに！」

つい大声を出してしまった。周りの人がこちらを見た。感情の振幅がおかしくなっているようだ。安静にしていないと。俺は再び黙り込んだ。

「なあ」

しばらくして稲倉がまた俺に話しかけてきた。

「いつまでここに座ってる気だよ」

うるさい。そんな俺の勝手だ。

「若者が席を独占してちゃ、ジジババが困る」

俺は稲倉が道徳的なことを言ったのに驚いて顔をあげた。稲倉はだまじめな顔をしていた。思わずプツと吹き出してしまった。

「ここはシルバーシートじゃねえだろ」

言いながらおかしくなってきた。笑いも止まらなくなった。稲倉がお年寄りに席を譲る？ 傑作だ。コメデイ大賞だ。

「なに笑ってたんだ」稲倉は不満そうだった。「おまえ、笑うと中学生に見えるな」

「は？」俺が笑い涙を浮かべながら言った。

「いつも、頑固じじいみたいな面してるからな」

そっぴりや久々に笑った。やっぱり感情の振幅がおかしいのだ。

愛原ナギサが死んだのに、こんなに笑うなんて。

「ほら、展望ラウンジいくぞ」

稲倉が立ちあがった。よっぽど気に行ったらしい。風に当たるのもわるくないかもしれない。俺も立ちあがって稲倉の後を追った。

振り返ると俺たちが座っていた席には、いかにも厚かましい顔のブルドックに似たオバサンが座っていた。

「いなくなっちゃったよお、愛原ナギサ」

俺が手すりに腕を乗つけたまま空しく笑った。眼下では青いライオンの入った飛行機が、離陸にむけてスタンバイしていた。整備員た

ちが慌ただしく働いている。

「死んだな」

稲倉の言い方は断定的だった。ズバツとした物言いのおかげで、俺も愛原ナギサが死んだという事実を認めざるを得なかった。

「なんでだろう」

「あ？」

「なんで自殺なんて。結婚したばかりなのに」

「決まってるだろ」

稲倉が自信たっぷりに言った。ほんとうに、いちいち得意気だ。

そして言うことは決まって大したことはない。嫌なことがあったからさ、とかドヤ顔で言ったものなら殺してやる。

「一応きくけど、なんで死んだと思うんだ？」

「行けなかつたんだな」稲倉が言った。

はあ。予想を越えて意味不明の回答が返ってきた。

「どこへ？」

「別の世界」

「というと？」

「仕事の、アイドルの世界しか無かつたんだろ。愛原ナギサには」稲倉が続けた。「ようやく結婚して家庭つつう世界を持つとしたのに、仕事がそれを許さなくて絶望したんだろ」

ときどき、本当にごく稀にだが、稲倉がものすごく頭のいい奴なんじゃないかと思うときがある。頭がいいというよりは、大人、というべきだろうか。

愛原ナギサのことを何も知らない奴が偉そうに喋るのは許しがたいのだが、偉そうに喋るのはこいつの専売特許だし、少し言っていることが分かってしまうので突っ込まないことにした。

稲倉には稲倉の、不良としての世界があつて、俺には俺の、いじめられっ子としての世界がある。そしてきつと、ずっとその世界だけで過ごしていたら、どこかでおかしくなってしまうのだ。

「北海道、行くだろ？」

稲倉が再び訊いてきた。こいつにとって北海道旅行とは、普段の世界から抜け出すことを意味しているのかもしれない。

「まあ俺が笑った。「宿は予約されてないけど」

そうだ、ここまで来て行かないなんてもつたいたい。愛原ナギサが死んだなら、傷心旅行にすればいい。

「おい、あいつら」

稲倉が展望ラウンジの奥を指さした。俺はびっくりして口を開けた後、おかしくなって笑い始めた。

バズーカ男たちがまだ熱心に飛行場を見つめていた。アロハシャツの男も飽きもせず、身を乗り出して最終点検の様子を眺めている。おみそれしました。空港は確かに、何時間も滞在する価値のある場所のようです。

「あいつらの世界は奥が深すぎる」

俺が言うと、稲倉も笑った。

ゴオツと飛行機が飛び立った。

「いつてらっしやーい」

アロハシャツの男が両手をブンブンと振り回した。

越えていけ（後書き）

もはや学園を飛び出していますが、旅行編ということでご指摘、ご感想お待ちしております。

竜宮城（前書き）

縦書き表示推奨です。

竜宮城

北海道から遠く離れた九州では、折しも口蹄疫という家畜の伝染病が蔓延していた。何キロメートル離れていようと、海を二つも隔てた場所に位置していようと、札幌は宮崎と同じ日本に属しているようだ。「羊が丘展望台」とは名ばかりで、過保護な親を持つ箱入り娘のように、羊たちはどこか別の場所へ避難させられていた。

「これじゃ、ただの展望台だな」

稲倉が入口でもらったパンフレットと目の前の景色を見比べて言った。パンフレットに印刷された草原にたむろする薄茶色の羊たちの姿は、どこにも見当たらなかった。俺にも見えなかったから、馬鹿には見えない、という類のものでもないらしい。

羊がいらないなら閉鎖すればいいのに。受付の女性はちよつと可愛いのをいいことに、俺たちから入場料を六百円も巻きあげていた。札幌を眺めるただの「展望台」に、一人三百円払ったことになった。実際のところ、展望台といえるかも微妙だ。空には邪悪な色をした雲が低く垂れこめていて、すぐ近くにある札幌ドームの輪郭がギリギリ分かる程度の視界しかなかった。それでも展望台であると信じ込まないと、右手をあげて遙か彼方の永遠の真理を指しているんだか、一番近くのコンビニを聞かれて道を教えているところだからからないクラーク博士の立像に、缶ジューズ5本分の金を払ったことになってしまう。

俺は「すごいなあ。北海道つて感じ。いい眺めだなあ」と無理にはしゃいでみせたが、稲倉が「そうか？」と一蹴するので落胆を誤魔化せなかった。

悔しいので無料サービスらしい記念写真を撮ってもらった。男二人で撮ってもなにも嬉しくないのだが、なんとか入場料分の元は取らなくては、と完全に主婦思考になっていた。できあがった写真は無料にふさわしく映りが悪くて、俺と稲倉はカツあげの真つ最中に

カメラを向けられて咄嗟に体裁を取り繕った人たちのようだった。稲倉はポケットに手を突っ込んでカメラ目線で睨んでいるし、俺のピースは所在なさげに浮いていたし、クラーク博士の頭にはタイムミング悪くカラスがとまっていた。

俺と稲倉は五時半の飛行機に二人分のキャンセルが出たおかげで、予定より（今日決まったことを予定というかは知らないが）早く北海道についていた。とりあえず札幌を観光しようと、地下鉄とバスを使って豊平区の「羊不在展望台」までやってきたのだが、ただ無駄に金をかけてしまったような気がする。果たして早い便に乗れたのが幸か不幸か、少なくとも最初に選んだ観光地は完全にスベっていた。

展望台を出て、札幌ドームを本当にチラッと盗み見たあと、時間も時間なので今日はあと一か所観光したら宿を探そう、ということになった。そこで旅行雑誌には必ず乗っている、かの有名な札幌時計台に、俺たちはこれまでのガツカリ感を払拭する逆転ホームランを期待した。

「え、これ？」

木造の簡素な建築物を見て、俺は間の抜けた声をあげた。札幌駅から少し南下した場所にあった時計台は、高いビルに囲まれて居場所がなくなっただよように、小さくなってたらずんでいた。特に大きいわけでもなければ、古めかしさも感じさせず、理科室の庭にある百葉箱を少し豪華にした感じだった。稲倉などは時計台の真横に差し掛かっても、立ち退きを迫られながらも抵抗をみせている民家だと勘違いしたのか、全く気づかずに通り過ぎようとしたくらいだ。

「きれいだね、ライトアップされてさ」

俺が無理やり頬を持ちあげながら言った。

「そうか？」

稲倉が一蹴入魂と言わんばかりに俺の努力を蹴散らした。

夕飯にと入ったカレー屋で北海道名物スープカレーを食べた。駅の近くにあった黄色い看板のその店は、俺たちが知らないだけで正体は有名なチエーン店だったらしく、大量生産したルーをレンジで温めたカレーの味がした。

信じられないことだが、こんな旅行でも俺は楽しんでた。バスの補助席で左右前後の悪魔から注目を浴びないようにジツとしていたり、夜の宿舎でいち早く布団をかぶって朝まで寝たふりを続けることに比べればマシ、いや、ここ数年間で一番と言つていいほど俺の気分は高揚していた。たしかに俺と稲倉は馬鹿みたいに期待外れな場所ばかり巡っているが、きつと一生の思い出になるだろうな、という確信があった。

よしよし、それならこれはどうじゃ。と不幸の神様がムキになったのか知らないが、俺たちがカレー屋を出るとバケツをひっくり返したような雨になっていた。

「奥山、傘は？」

「あるけど」俺がもごもごと言った。「駅のロッカーの中に」

札幌に到着してすぐに、俺たちは三泊四日分の荷物が入ったスポーツバッグをコインロッカーに預けていた。コンパクトだが広げると十分にでかい俺の折り畳み傘は、開発者の意図に反して持ち運ばれていなかった。「稲倉こそ、傘は？」と聞こうとしてやめた。こいつがそんなに用意周到なわけがない。一瞬歩いただけで着衣水泳の後のようになりそうな落水っぷりを見て、これはさすがに最悪だな、と俺は神様に白旗を振った。

雨は一向に止まなかった。俺たちは香辛料の匂いが漂うカレー屋の店先で、途方にくれて暗くなつた空を見上げていた。店内でスープカレーを食べていたときも他の客はいなかったが、これからレトルトのような味のカレーを食べようと考えていた客もいなかったら

しく、突っ立った俺たちの脇を通り抜けていく人は一人もいなかった。

ふと、ガラス越しに店内を振りかえると、エプロンをつけたバイトの女性が不愉快そうに俺たちを見ていた。極道みたいな顔をした男が店先に立っているから客が来ないのだとでも言いたげだった。十中八九、客が来ないのは悪天候とカレーの味のせいだ。今回ばかりは稲倉をかばいたかったが、営業妨害で訴えられたくはない。

「そろそろ、どっか行かないとまずいかも」

俺が切りだすと、稲倉も頷いた。

「駅まで走るか。すぐそこだ」

距離にしたら五十メートルほどしかなかったが、俺たちが札幌駅へと駆け込んだときには全身がしぼれるほど濡れていた。まだ関東では残暑が厳しいくらいなのに、北海道の夜は予想以上に冷えて、入り口から風が吹き抜ける度に体が震えた。どう考えても、半袖のシャツ一枚で来たのは間違이었다。エクアドルにダウンジャケットを着て行く馬鹿はいまい。

「寒いかな？」

髪の前から水をしたたらせながら稲倉が言った。こいつは俺より馬鹿だ。半袖どころか下は短パンにサンダルである。それなのに顔色ひとつ変えていないのは、触覚が鈍いか存在していないからだろう。メンソールを塗ろうがカプサイシンを塗ろうが、冷たいとも熱いとも思わなそうだ。

「逆に、なんで寒くないわけ？」

「これぐらい平気だろ」

このくらい鈍感、よくいって鷹揚なら、さぞ生きることが楽だろう。稲倉と違い繊細で感受性豊かで頭の回転の速い俺は、足踏みをしながら栗立った肌をさすった。

「とりあえず預けた荷物をとってこよう」俺が歯の根を鳴らしながら言った。「タオルも入ってるし」

「俺は持つてきてねえ」
「いらないだろ」

スポーツバッグからタオルを出したものの人の目が気になって、俺はわざわざ便所に行って体を拭いた。本当は服ごと替えてしまいたかったのだが、替えの服は最低限しか持つてきていない。べつたりと体にまとわりつくシャツは気持ち悪かったが、我慢して着続けることにした。

「ホテル、どうしようか」

「探すか？ この雨ん中」

「うーん……」

正直、気力も体力も残っていなかった。そもそも中学生の男二人を、飛び込みで泊めてくれるようなホテルはあるだろうか。

「電話で探してみよう」

俺は駅のあるちこちにあるパンフレットを集め、電話番号の載っているホテルに空室の確認をし始めた。その間、稲倉は暇そうにジャガイモを揚げたスナック菓子を貪っていた。俺が買った俺の夜食だ。「だめだ」俺が絶望的な声をだした。「満室、満室、それから中学生の宿泊お断り」

「散々だな」

そうだよ、散々だよ。誰かさんがホテルを予約済みみたいな思わせぶりな言動をしたせいで。やっぱり中学生の宿泊には親の許可が必要で、事前の予約は必須条件らしい。ユースホステルみたいな所なら望みはありそうだけど、どこにあるのか、そもそもこの辺にあるのかもわからない。

このままホテルが見つからなければ、残る選択肢は一つだ。

「しょうがねえな」稲倉が言った。

「いやだぞ、俺は」

「しょうがねえだろ」

「無理、絶対やだ」

「今日は野宿だ」

ああ、神様。負けを認めますから、どうかご慈悲を。天蓋付きベツドとはいいません、二畳あれば十分ですから眠る場所を用意してください。

途方にくれたまま駅構内のベンチに座っていると、あんなに大勢いた人たちがみると数を減らしていった。最終列車が発車する時間になると、酔っ払った大学生が南口から北口へと通り抜けていく以外、ぱったりと人通りはなくなった。札幌駅は不夜城ではないようだった。

照明がほとんど落とされた札幌駅は、さっきまでと同じ空間とはとても思えなかった。ドラキュラ伯爵かフランケンシュタインでも出てきそうだが、俺たちが一番おそれているのは制服を着た警備員だ。少し前に、一歩間違えたらヤクザに入っていたであろう警備員が、懐中電灯を片手に見まわりをしていたのだ。

野宿といってもこの悪天候の中、道端にテントを張って寝るわけにはいかない。だいたい、テントも設営場所もない。結局俺たちは朝が来るまで札幌駅内で休ませてもらうことにしたのだ。が、無人駅ならまだしも北海道の中心である巨大な駅に、アポ無しで宿泊することは当然ながら許可されていないようだ。

息を殺しながら誰にも見つからなそうな場所を探して歩き回っていると、スパイクツズにでもなった気分だった。後ろめたさからくる緊張感と、非日常が演出する興奮で、疲れや眠気がどこかへ飛んでいってしまった。稲倉がさっきから「やべえ、おもしれえ」と何度も報告してくるので、静かにさせるのに必死だったということもある。

「ここならいいだろ」

稲倉がドサツとプラスチック製のベンチに腰を下ろした。ダンジヨンのような構内を彷徨っているうちに、駅から伸びる地下歩道に入っていたようだ。

「良くはないだろうけど、まあ、ここしかないか」

椅子に座ると腰にズシツとした重みを感じられて、ああ、やっぱり疲れていたんだな、と思わされた。

地下歩道は公共の道路なんだから、俺たちが一休みする権利だつてあるはずだ。そう思えば、たとえ屁理屈でも気休めにはなった。

激しい雨だからこそ、地下歩道を利用する人はいそいなものだが、こんな深夜にわざわざ外へ出てくる人自体がないみたいだ。さつきから人っ子一人通らない。まあ誰かがやってきたところで、稲倉がいれば危険な目には合わないだろう。毒をもって毒を制す。不良は不良よけになるのだ。

「なあ」ベンチに横になつた稲倉が言った。「タオル一枚くれよ」まったく、タオルの一枚も持つてこないで、逆に何なら持つてきているんだらうか。

俺がバスタオルを一枚放り投げると、稲倉はかけるのではなく折り畳んで頭の下に敷いた。枕が変わると寝られないタイプなのだろうか。そんな意外性はいらない。

俺はもう二枚タオルを出すと、一枚をベンチに敷き一枚を体にかけた。誰が座つたかもわからないベンチにタオルを敷くのは抵抗があつたが、考えてみれば直接横になるほうが気色悪い。俺は繊細で思慮深くて、まあ、とにかくデリケートなのである。

少しウトウトしていたようだ。

俺は寒気を感じて目を覚ました。いつの間にか掛けたタオルが地面に落ちていた。タオルを拾いながら稲倉のほうを見ると、俺とは反対側を向いて静かに横になっていた。寝ているのか起きているのか、まさか死んでるといふことはないだろうが、見ただけでは分かんかった。俺はタオルを手で払ってから再び自分の体に向け、もう一度眠ろうとした。

目を閉じて耳をすますと、冷たい雨が地上を打つ音が聞こえた。それは巨大な川が流れる音のようにも聞こえて、自分が川底に棲む

魚にでもなつたように感じた。ここには俺を閉じ込めようとする、くすんだ灰色の校舎は無い。毎晩のように俺を苦しめるイメージが、今日は浮かんでこなかった。

教室や廊下、体育館からトイレまで、嫌な思い出が染みついた学校のあらゆる場所が、どこまでも追いかけてくる。そいつらは夜になると俺の頭の中に現れて、気持ちを掻き乱す。朝が来るのが怖くなって、それでも朝は来て、俺は布団の中で震えているのだ。

どんなに遠い場所にいても、奴らはやってきた。次の登校日がどんなに先でも、奴らはやってきた。でも、なぜだろう、今日は穏やかだ。こんなに落ちついた夜は何年ぶりだろう。

「おい」

稲倉の声が聞こえて目を開けた。目を開けたら水の中にいるような気がしたが、無機質なコンクリートの天井が広がっていただけだった。

「おい、寝たか？」

「ん、起きてるよ」

「なんか話せよ」稲倉が呻いた。「寝れねえ」

やはり枕が変わったせいなのだろうか。稲倉なら交差点の真ん中でもいびきを掻いていそうなもんだが。まあ「話そう」「じゃなくても話せよ」なのは稲倉らしい。

「急に言われてもなあ」

雨が降る夜、札幌の暗い地下歩道で話すのにふさわしいロマンティックな話は咄嗟には思いつかなかった。一年かけてもたぶん思いつかない。

「なんでもいいぞ」

「じゃ、眠れるようにおとぎ話でも聞かせてやるか？」

「死ね」

なんでもいいんじゃないかったのか。以前の俺なら魔王様から「死ぬ」と言われたものなら殺される前に「仰せのままに、腹を切りをば」と自害を決意してもおかしくなかった。でも今は稲倉の理不尽

にも慣れたし、冗談で言っているのが分かる。

「なあ、それなら、聞きたいことがあるんだけど」

「おう、なんだ？」

俺は少し躊躇った。でもこのチャンスを逃したら、一生聞くことができない気がする。ええい、修学旅行に暴露大会はつきものなんだから。

「あのさ、おまえ、なんで勉強始めたんだ？」

ずっと不思議に思っていたことだった。稲倉と勉強という水と油みたいな物が、どうして結びつこうとしているのか。

稲倉は黙りこんだ。プライベートな部分に踏み込みすぎただろうか。本気で怒らせたなら、命の心配をしないといけない。

ひよっとして眠ってしまったのかと俺が思い始めたころ、稲倉が口を開いた。

「親父みたいになりたくないから」

「親父？」

「ああ、死んだんだ、去年」

稲倉が空模様について喋るかのようにサラツと言ったので、俺は「あ、そうなの」と間抜けな相槌を打ってしまった。実際、あまり驚かなかった。ほこりを被ったベンツ、男ものの革靴。父親がいな家が持つ、もろくて物悲しい独特の空気。俺の家で感じる空気と同じものが稲倉の家にも漂っていることに、何度か通っているうちに気づいていたからだ。

「親父な、本物のヤクザだったんだ」

一度口を開いてからは、稲倉は流れるように喋った。

「背中にさ、でっけえ鯉の刺青が掘ってあって、なんか親父の顔より、その鯉の顔のほうが忘れられねえんだよな」

妙に納得した。大学病院の院長とかも、一周回ってそれはそれであり得えそうだけど、ヤクザ以上に稲倉の親父にふさわしい職業はない。

「くそ親父だったけど、まあ、嫌いじゃなかった」

いつの間にか、稲倉は起き上がってベンチに座っていた。

「けど、あっさり死んじゃったよ。なにをどうトラブったのか、詳しいことはわかんねえけど、股間を二発も撃たれたんだと」

「痛そうだ」自分の玉がひゅんと縮む。

「笑えるだろ」稲倉は笑みを浮かべた。「でもさ、死体見たとき、おれ、吐いちまったんだ。もちろん死体つつつても綺麗にした後の体なんだけど、顔の形が誤魔化せないくらい変わっててさ、ありや骨格変わるぐらいまで殴られたんだな。あ、ビビって吐いたわけじゃねえからな。それを見たとき、なんつーか、うまく言えないけど、ああ俺もこいつみたいに人生を終わるのか、って思ったんだ」

稲倉は話しながら頭を掻きむしっていた。心の中が言葉にするとうまく伝わらないことに腹を立てているようだった。もどかしげにつつかえながら話す稲倉が、俺には子供に見えて、そしていつもよりでかく見えた。

「で、勉強してやろうと思ったわけ」

考えがまとまらなくて、説明するのが面倒くさくなったらしい。

稲倉は強引に締めて長広舌を終えると、全力疾走のあとパターンと倒れこむように、今度はいつさい喋らなくなった。

それでも、そこまで聞けば十分、俺には稲倉の気持ち理解できた。数時間前の、ビニールシートを被せられていた愛原ナギサの姿が浮かんだ。そして俺の部屋に積み重なった潰された空き缶を思い出した。

稲倉も俺と同じなのだ。自分を囲う壁をよじ登って、幸せが広がる外の世界へ。

「結局、稲倉にばっか話させちゃったな」

でも稲倉の「話せよ」が「話そう」なのを、俺はちゃんと分かっている。

「じゃあ、次はおれが話す番だな。三日前、風呂入ったときに気づいたんだけど、おれ、乳首のところに……」

低く唸るようないびきが俺の話をさえぎった。いつの間にやら稲

倉は再び横になっていた。やれやれ、と俺もタオルを掛けて横になった。

でも俺は、稲倉が饒舌になった照れ隠しで狸寝入りをしていることも、ちゃんと分かっているのだ。

竜宮城（後書き）

次回、舞台が学校に戻ります。たぶん。
あと少しで完結しそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0662w/>

クライム・トゥ・ザ・ハッピー

2011年10月6日03時33分発行